

新潟県介護職員初任者研修事業実施要綱

1 目的

この要綱は、介護保険法施行令（平成 10 年政令第 412 号。以下「政令」という。）第 3 条第 1 項各号の規定に基づき、新潟県知事又は新潟県知事が指定する事業者（以下「指定事業者」という。）が行う介護員養成研修事業について定めるものであり、その研修の課程及び目的は次のとおりとする。

(1) 研修の課程

この要綱で定める研修の課程は、介護保険法施行規則（平成 11 年厚生省令第 36 号。以下「施行規則」という。）第 22 条の 23 に規定されている介護職員初任者研修課程とする。

(2) 介護職員初任者研修課程の目的

介護に携わる者が、業務を遂行する上で最低限の知識・技術とそれを実践する際の考え方のプロセスを身に付け、基本的な介護業務を行うことができるようにすることを目的とする。

2 実施主体

事業の実施主体は、新潟県知事又は指定事業者とする。

3 受講対象者

受講対象者は、訪問介護事業に従事しようとする者若しくは在宅・施設を問わず介護の業務に従事しようとする者とする。

4 研修の内容

研修時間は 130 時間以上とし、最低限実施すべきカリキュラム内容及び科目ごとの時間数は、次のとおりとする。

科 目 名	時 間 数
1 職務の理解	6 時間
2 介護における尊厳の保持・自立支援	9 時間
3 介護の基本	6 時間
4 介護・福祉サービスの理解と医療との連携	9 時間
5 介護におけるコミュニケーション技術	6 時間
6 老化の理解	6 時間
7 認知症の理解	6 時間
8 障害の理解	3 時間
9 こころとからだのしくみと生活支援技術	75 時間
10 振り返り	4 時間

5 研修の方法

- (1) 研修は、講義及び演習により行い、必要に応じて実習により行うものとする。
なお、講義と演習を一体的に実施すること。
- (2) 4に定めるカリキュラムのうち、「9 ところとからだのしくみと生活支援技術」には、介護に必要な基礎的知識の理解の確認及び生活支援技術の習得状況の確認を含むものとする。
- (3) 4に定めるカリキュラムのうち、「1 職務の理解」及び「10 振り返り」においては、施設の見学等の実習を活用することができるものとする。
また、効果的な研修を行うため必要があると考えられる場合には、他のカリキュラムにおいても施設の見学等の実習を活用することができるものとする。
- (4) 4に定める各カリキュラム内の時間配分については、内容に偏りがないよう十分留意するものとする。
- (5) 4に定める研修時間（130 時間）のうち、科目ごとの上限を超えない範囲で、最大 40.5 時間について、講義を通信形式によって行うことができるものとする。この場合において、添削指導、面接指導及び評価を適当と認める方法により行わなければならない。
なお、科目ごとの通信学習の上限は別紙 1 のとおりとする。

6 実習施設の要件

- 5（1）により実習を行う場合は、以下の要件を満たす施設等において実施することとする。
- (1) 介護保険法による指定又は許可を受けた居宅サービス事業所、介護予防サービス事業所、介護保険施設、地域密着型サービス事業所若しくは地域密着型介護予防サービス事業所又は障害者自立支援法による指定を受けた障害福祉サービス事業所若しくは障害者支援施設に該当すること。
 - (2) 実習指導者（実習受入担当者）が確保されていること。
 - (3) 開設後 1 年以上を経過していること。

7 科目の免除

事業の実施主体は、受講者が有する資格等を確認したうえで、介護職員初任者研修課程の科目を以下のとおり免除することができるものとする。

- (1) 看護師等の有資格者に係る科目の免除
看護師、准看護師又は保健師の資格を有する者は、介護職員初任者研修課程の全科目を免除できるものとする。
- (2) 訪問介護員養成研修 3 級課程修了者に係る科目の免除
「介護保険法施行規則の一部を改正する省令」（平成 24 年 3 月 2 日厚生労働省令第 25 号）による改正前の介護保険法施行規則第 22 条の 23 第 1 項に規定する訪問介護に関する 3 級課程の修了者は、別紙 2 のとおり免除できるものとする。
- (3) 居宅介護従業者養成研修課程修了者に係る科目の免除
「指定居宅介護等の提供に当たる者として厚生労働大臣が定めるもの」（平成 18 年 9 月 29 日厚生労働省告示第 538 号）第 1 条第 2 号に規定される居宅介護従業者養成研修の課程を修了した者は、次のとおり科目を免除できるものとする。
ア 当該告示の第 2 条の規定により読み替えられた「介護保険法施行規則第 22 条の 23 第 2 項に規定する厚生労働大臣が定める基準」（平成 18 年 3 月 31 日厚生労働省告示第 219 号）（以

下「基準告示」という。)の別表第二の研修の課程を修了した者は、介護職員初任者研修課程の全科目を免除できるものとする。

イ 当該告示の第2条の規定により読み替えられた基準告示の別表第三の研修の課程を修了した者は、介護職員初任者研修課程の全科目を免除できるものとする。

ウ 当該告示の第2条の規定により読み替えられた基準告示の別表第四の研修の課程を修了した者は、(2)と同等の科目を免除できるものとする。

8 講師の要件

介護職員初任者研修課程は、別紙3に定める要件を満たす者を講師として実施するものとする。

9 研修の履修期間

介護職員初任者研修課程の履修期間は、おおむね8か月以内とする。

10 修了評価

事業の実施主体は、カリキュラムの全科目を履修した受講者に対し、別紙4「介護職員初任者研修における目標、評価の指針」中の『各科目の到達目標、評価、内容』において定める「修了時の評価ポイント」に沿って、知識・技術等の習得度の評価(以下「修了評価」という。)を行うものとする。なお、修了評価は、筆記試験により1時間程度実施するものとし、修了評価に要する時間は4に定めるカリキュラムの時間数には含めないものとする。

11 修了証明書の交付

事業の実施主体は、5(2)の確認により介護技術の習得が講師によって評価され、かつ、修了評価の結果が所定の水準を超えるものであることが確認された受講者に対し、別記第1号様式による修了証明書を交付するものとする。

12 補講の実施

事業の実施主体は、以下の場合に補講を行うことができるものとする。

(1) 受講者がやむを得ない理由により研修の一部を欠席した場合

(2) 受講者が、10に定める「修了時の評価ポイント」に示す知識・技術等の習得が十分でないと認められる場合

13 修了者名簿の管理

(1) 事業の実施主体は、修了証明書を交付する者について、事業の実施主体の名称、実施主体が指定事業者である場合にあつては事業所番号、修了証明書番号、修了年月日、氏名及び生年月日等必要事項を記載した修了者名簿を、別記第2号様式により作成し、管理するものとする。

なお、指定事業者は、当該名簿の写しを新潟県知事に提出するものとする。

(2) 新潟県知事は、指定事業者から提出された名簿を適正に管理するものとする。

14 研修の教材

教材は、別紙4「介護職員初任者研修における目標、評価の指針」に基づき、カリキュラム内容を網羅し、研修を効果的に実施できるものを使用するものとする。

15 情報の開示

事業の実施主体は、教育体制（講師、設備等）、教育内容（シラバス、演習手法、教材等）、実績情報、受講者や事業者（研修修了者の雇用者）からの評価等の情報項目（別紙5「事業の実施主体が開示すべき情報の内訳」）を自らホームページ上などにおいて開示するものとする。

16 受講時等の本人確認

事業の実施主体は、受講申込の受付時又は研修の初回講義時等において、公的証明書により、受講申込者又は受講者が本人であるかどうかの確認を行うものとする。

17 事業者の指定

新潟県知事は、政令第3条第2項の規定に基づき、新潟県内において市町村及び民間団体等が行う介護員養成研修事業について、事業所及び通学又は通信の形式ごとに、当該事業を実施する事業者を指定することができる。

なお、指定について必要な事項は、この要綱に定めるもののほか、別途定める。

18 その他

(1)「訪問介護員養成研修事業指定の取扱いについて」(平成12年4月18日付け高齡第55号通知)及び「新潟県訪問介護員養成研修事業実施要綱等の制定について(通知)」(平成17年6月7日付け高齡第304号通知)に基づく養成研修の1級課程又は2級課程を修了した者及び修了したとみなす者は、それぞれこの要綱に定める介護職員初任者研修課程を修了した者とみなす。

(2)次に掲げる者は、それぞれこの要綱に定める介護職員初任者研修課程を修了した者とみなす。

ア 「新潟県介護員養成研修事業実施要綱等の制定について(通知)」(平成19年6月4日付け高齡第222号通知)に基づく介護職員基礎研修課程、訪問介護に関する1級課程又は2級課程(以下「旧研修課程」という。)を修了した者及び修了したとみなす者

イ この要綱の施行の際現に旧研修課程を受講中の者であって、施行後当該旧研修課程を修了した者

(3)新潟県知事は、7(1)、(3)ア及び(3)イに定める全科目免除に該当する者が、新潟県内の訪問介護事業等に従事する場合に限り、修了証明書を交付するものとする。

なお、修了証明書の交付手続に必要な事項は、別途定める。

附 則

(施行期日)

この要綱は平成25年4月1日から実施する。

(準備行為)

この要綱に定める研修及び事業者の指定に関し必要な手続その他の行為は、施行前においても、この要綱の規定の例により行うことができる。

(別紙1)

通信形式で実施できる科目ごとの上限時間と各科目の総時間数

科 目	通信形式で 実施できる 上限時間	総時間数
1 職務の理解	—	6 時間
2 介護における尊厳の保持・自立支援	7.5 時間	9 時間
3 介護の基本	3 時間	6 時間
4 介護・福祉サービスの理解と医療との連携	7.5 時間	9 時間
5 介護におけるコミュニケーション技術	3 時間	6 時間
6 老化の理解	3 時間	6 時間
7 認知症の理解	3 時間	6 時間
8 障害の理解	1.5 時間	3 時間
9 こころとからだのしくみと生活支援技術	12 時間	75 時間
10 振り返り	—	4 時間
合 計	40.5 時間	130 時間

(別紙2)

免除可能科目及び時間

科 目	時間数
2 介護における尊厳の保持・自立支援	9 時間
4 介護・福祉サービスの理解と医療との連携	9 時間

介護職員初任者研修課程の講師の要件

科 目	要 件
1 職務の理解	次に掲げる者のいずれかであること。
2 介護における尊厳の保持・自立支援	① 介護福祉士、医師、保健師、助産師、看護師又は社会福祉士の資格を取得した後その資格を生かした実務経験を有する者
3 介護の基本	
4 介護・福祉サービスの理解と医療との連携	② 学校教育法(昭和22年法律第26号)に基づく大学(大学院及び短期大学を含む。)又は高等専門学校において、教授、准教授、助教又は講師として、介護職員初任者研修課程において担当する科目に関し教授する資格を有する者
5 介護におけるコミュニケーション技術	
6 老化の理解	
7 認知症の理解	③ 学校教育法に基づく専修学校の専門課程の教員として、介護職員初任者研修課程において担当する科目に関し経験を有する者
8 障害の理解	
10 振り返り	
9 こころとからだのしくみと生活支援技術	次に掲げる者のいずれかであること。 ① 介護福祉士、医師、保健師、助産師、看護師又は社会福祉士の資格を取得した後その資格を生かして3年以上の実務経験を有する者 ② 学校教育法に基づく大学(大学院及び短期大学を含む。)又は高等専門学校において、教授、准教授、助教又は講師として、介護職員初任者研修課程において担当する科目に関し教授する資格を有する者 ③ 学校教育法に基づく専修学校の専門課程の教員として、介護職員初任者研修課程において担当する科目に関し3年以上の経験を有する者 ④ 歯科医師又は歯科衛生士の資格を取得した後その資格を生かして3年以上の実務経験を有する者(口腔ケアに係る部分に限る。) ⑤ 理学療法士の資格を取得した後その資格を生かして3年以上の実務経験を有する者(移動、移乗に係る部分に限る。) ⑥ 臨床心理士又は精神保健福祉士の資格を取得した後その資格を生かして3年以上の実務経験を有する者(介護に関するこころのしくみの理解に係る部分に限る。)

(別紙4)

介護職員初任者研修における目標、評価の指針

1 介護職員初任者研修課程を通じた到達目標

- (1) 基本的な介護を実践するために最低限必要な知識・技術を理解できる。
- (2) 介護の実践については、正しい知識とアセスメント結果に基づく適切な介護技術の適用が必要であることを理解できる。
- (3) 自立の助長と重度化防止・遅延化のために、介護を必要とする人の潜在能力を引き出し、活用・発揮させるという視点が必要であることを理解できる。
- (4) 利用者ができるだけなじみのある環境で日常的な生活を送れるようにするために、利用者一人ひとりに対する生活状況の的確な把握が必要であることを理解できる。
- (5) 他者の生活観及び生活の営み方への共感、相手の立場に立って考えるという姿勢を持つことの大切さについて理解できる。
- (6) 自立支援に資するサービスを多職種と協働して総合的、計画的に提供できる能力を身に付けることが、自らの将来の到達目標であることを理解できる。
- (7) 利用者本位のサービスを提供するため、チームアプローチの重要性とその一員として業務に従事する際の役割、責務等を理解できる。
- (8) 利用者、家族、多職種との円滑なコミュニケーションのとり方の基本を理解できる。
- (9) 的確な記録・記述の大切さを理解できる。
- (10) 人権擁護の視点、職業倫理の基本を理解できる。
- (11) 介護に関する社会保障の制度、施策、サービス利用の流れについての概要を理解できる。

2 各科目の「到達目標・評価の基準」

(1) ねらい (到達目標)

「ねらい (到達目標)」は、各科目が、実務においてどのような行動ができる介護職員を養成しようとするのかを定義したものである。

介護職員初任者研修修了時点で直ちにできることは困難だが、研修事業者は、研修修了後一定の実務後にこの水準に到達する基礎を形成することを目標に、研修内容を企画する。

(2) 修了時の評価ポイント

「修了時の評価ポイント」とは、介護職員初任者研修において実施する受講者の習得状況の評価において、最低限理解・習得すべき事項を定義したものである。

研修事業者は、受講者が修了時にこの水準に到達できていることを確認する必要がある。

「修了時の評価ポイント」は、評価内容に応じて下記のような表記となっている。

確認内容	「修了時の評価ポイント」の表記	確認方法
知識として知っていることを確認するもの	<ul style="list-style-type: none"> ・「列挙できる」…知っているレベル ・「概説できる」…だいたいのところを説明できるレベル ・「説明できる」…具体的に説明できるレベル 	<ul style="list-style-type: none"> * 筆記試験 * 口頭試験
技術の習得を確認するもの	・「～できる」「実施できる」	* 実技

(3) 各科目の内容例

各科目の「内容例」に示す、「指導の視点」及び「内容」は、各科目の内容について例示したものである。

3 各科目の到達目標、評価、内容

(1) 職務の理解（6時間）

①到達目標・評価の基準

ねらい	研修に先立ち、これからの介護が目指すべき、その人の生活を支える「在宅におけるケア」等の実践について、介護職がどのような環境で、どのような形で、どのような仕事を行うのか、具体的イメージを持って実感し、以降の研修に実践的に取り組めるようになる。
-----	--

②内容例

指導の視点	<ul style="list-style-type: none"> ・研修課程全体（130 時間）の構成と各研修科目（10 科目）相互の関連性の全体像をあらかじめイメージできるようにし、学習内容を体系的に整理して知識を効率的・効果的に学習できるような素地の形成を促す。 ・視聴覚教材等を工夫するとともに、必要に応じて見学を組み合わせるなど、介護職が働く現場や仕事の内容を、出来る限り具体的に理解させる。
内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 多様なサービスの理解 <ul style="list-style-type: none"> ○介護保険サービス（居宅、施設）、○介護保険外サービス 2. 介護職の仕事内容や働く現場の理解 <ul style="list-style-type: none"> ○居宅、施設の多様な働く現場におけるそれぞれの仕事内容 ○居宅、施設の実際のサービス提供現場の具体的イメージ（視聴覚教材の活用、現場職員の体験談、サービス事業所における受講者の選択による実習・見学等） ○ケアプランの位置付けに始まるサービスの提供に至るまでの一連の業務の流れとチームアプローチ・他職種、介護保険外サービスを含めた地域の社会資源との連携

(2) 介護における尊厳の保持・自立支援（9時間）

①到達目標・評価の基準

ねらい	介護職が、利用者の尊厳ある暮らしを支える専門職であることを自覚し、自立支援、介護予防という介護・福祉サービスを提供するにあたっての基本的視点及びやってはいけない行動例を理解している。
修了時のポイント評価	<p>2-① 介護の目標や展開について、尊厳の保持、QOL、ノーマライゼーション、自立支援の考え方を取り入れて概説できる。</p> <p>2-② 虐待の定義、身体拘束、及びサービス利用者の尊厳、プライバシーを傷つける介護についての基本的なポイントを列挙できる。</p>

②内容例

指導の視点	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的な事例を複数示し、利用者及びその家族の要望にそのまま応えることと、自立支援・介護予防という考え方に基づいたケアを行うことの違い、自立という概念に対する気づきを促す。 ・具体的な事例を複数示し、利用者の残存機能を効果的に活用しながら自立支援や重度化の防止・遅延化に資するケアへの理解を促す。 ・利用者の尊厳を著しく傷つける言動とその理由について考えさせ、尊厳という概念に対する気づきを促す。 ・虐待を受けている高齢者への対応方法についての指導を行い、高齢者虐待に対する理解を促す。
内容	<p>1. 人権と尊厳を支える介護</p> <p>(1) 人権と尊厳の保持</p> <p style="padding-left: 20px;">○個人としての尊厳、○アドボカシー、○エンパワメントの視点、○「役割」の実感、○尊厳のある暮らし、○利用者のプライバシーの保護</p> <p>(2) ICF</p> <p style="padding-left: 20px;">○介護分野における ICF</p> <p>(3) QOL</p> <p style="padding-left: 20px;">○QOL の考え方、○生活の質</p> <p>(4) ノーマライゼーション</p> <p style="padding-left: 20px;">○ノーマライゼーションの考え方</p> <p>(5) 虐待防止・身体拘束禁止</p> <p style="padding-left: 20px;">○身体拘束禁止、○高齢者虐待防止法、○高齢者の養護者支援</p> <p>(6) 個人の権利を守る制度の概要</p> <p style="padding-left: 20px;">○個人情報保護法、○成年後見制度、○日常生活自立支援事業</p> <p>2. 自立に向けた介護</p> <p>(1) 自立支援</p> <p style="padding-left: 20px;">○自立・自律支援、○残存能力の活用、○動機と欲求、○意欲を高める支援、○個別性／個別ケア、○重度化防止</p> <p>(2) 介護予防</p> <p style="padding-left: 20px;">○介護予防の考え方</p>

(3) 介護の基本（6時間）

①到達目標・評価の基準

ね ら い	<ul style="list-style-type: none"> ・介護職に求められる専門性と職業倫理の必要性に気づき、職務におけるリスクとその対応策のうち重要なものを理解している。 ・介護を必要としている人の個別性を理解し、その人の生活を支えるという視点から支援を捉えることができる。
修 了 時 の 評 価 ポ イ ン ト	<p>3-① 介護の目指す基本的なものは何かを概説でき、家族による介護と専門職による介護の違い、介護の専門性について列挙できる。</p> <p>3-② 介護職として共通の基本的な役割とサービスごとの特性、医療・看護との連携の必要性について列挙できる。</p> <p>3-③ 介護職の職業倫理の重要性を理解し、介護職が利用者や家族等と関わる際の留意点について、ポイントを列挙できる。</p> <p>3-④ 生活支援の場で出会う典型的な事故や感染、介護における主要なリスクを列挙できる。</p> <p>3-⑤ 介護職に起こりやすい健康障害や受けやすいストレス、またそれらに対する健康管理、ストレスマネジメントのあり方、留意点等を列挙できる。</p>

②内容例

指 導 の 視 点	<ul style="list-style-type: none"> ・可能な限り具体例を示す等の工夫を行い、介護職に求められる専門性に対する理解を促す。 ・介護におけるリスクに気づき、緊急対応の重要性を理解するとともに、場合によってはそれに一人で対応しようとせず、サービス提供責任者や医療職と連携することが重要であると実感できるよう促す。
内 容	<p>1. 介護職の役割、専門性と多職種との連携</p> <p>(1) 介護環境の特徴の理解</p> <p style="padding-left: 20px;">○訪問介護と施設介護サービスの違い、○地域包括ケアの方向性</p> <p>(2) 介護の専門性</p> <p style="padding-left: 20px;">○重度化防止・遅延化の視点、○利用者主体の支援姿勢、○自立した生活を支えるための援助、○根拠のある介護、○チームケアの重要性、○事業所内のチーム、○多職種から成るチーム</p> <p>(3) 介護に関わる職種</p> <p style="padding-left: 20px;">○異なる専門性を持つ多職種の理解、○介護支援専門員、○サービス提供責任者、○看護師等とチームとなり利用者を支える意味、○互いの専門職能力を活用した効果的なサービスの提供、○チームケアにおける役割分担</p> <p>2. 介護職の職業倫理</p> <p style="padding-left: 20px;">職業倫理</p> <p style="padding-left: 40px;">○専門職の倫理の意義、○介護の倫理（介護福祉士の倫理と介護福祉士制度等）、○介護職としての社会的責任、○プライバシーの保護・尊重</p> <p>3. 介護における安全の確保とリスクマネジメント</p> <p>(1) 介護における安全の確保</p> <p style="padding-left: 20px;">○事故に結びつく要因を探り対応していく技術、○リスクとハザード</p>

内 容	<p>(2) 事故予防、安全対策 ○リスクマネジメント、○分析の手法と視点、○事故に至った経緯の報告（家族への報告、市町村への報告等）、○情報の共有</p> <p>(3) 感染対策 ○感染の原因と経路（感染源の排除、感染経路の遮断）、○「感染」に対する正しい知識</p> <p>4. 介護職の安全 介護職の心身の健康管理 ○介護職の健康管理が介護の質に影響、○ストレスマネジメント、○腰痛の予防に関する知識、○手洗い・うがいの励行、○手洗いの基本、○感染症対策</p>
--------	--

(4) 介護・福祉サービスの理解と医療との連携（9時間）

①到達目標・評価の基準

ね ら い	介護保険制度や障害者自立支援制度を担う一員として最低限知っておくべき制度の目的、サービス利用の流れ、各専門職の役割・責務について、その概要のポイントを列挙できる。
修 了 時 の 評 価 ポ イ ン ト	<p>4-① 生活全体の支援のなかで介護保険制度の位置付けを理解し、各サービスや地域支援の役割について列挙できる。</p> <p>4-② 介護保険制度や障害者自立支援制度の理念、介護保険制度の財源構成と保険料負担の大枠について列挙できる。 例：税が財源の半分であること、利用者負担割合</p> <p>4-③ ケアマネジメントの意義について概説でき、代表的なサービスの種類と内容、利用の流れについて列挙できる。</p> <p>4-④ 高齢障害者の生活を支えるための基本的な考え方を理解し、代表的な障害者福祉サービス、権利擁護や成年後見の制度の目的、内容について列挙できる。</p> <p>4-⑤ 医行為の考え方、一定の要件のもとに介護福祉士等が行う医行為などについて列挙できる。</p>

②内容例

指 導 の 視 点	<ul style="list-style-type: none"> ・介護保険制度・障害者自立支援制度を担う一員として、介護保険制度の理念に対する理解を徹底する。 ・利用者の生活を中心に考えるという視点を共有し、その生活を支援するための介護保険制度、障害者自立支援制度、その他制度のサービスの位置付けや、代表的なサービスの理解を促す。
内 容	<p>1. 介護保険制度</p> <p>(1) 介護保険制度創設の背景及び目的、動向 ○ケアマネジメント、○予防重視型システムへの転換、○地域包括支援センターの設置、○地域包括ケアシステムの推進</p> <p>(2) 仕組みの基礎的理解 ○保険制度としての基本的仕組み、○介護給付と種類、○予防給付、○要介護認定の手順</p>

内 容	<p>(3) 制度を支える財源、組織・団体の機能と役割 ○財政負担、○指定介護サービス事業者の指定</p> <p>2. 医療との連携とリハビリテーション ○医行為と介護、○訪問看護、○施設における看護と介護の役割・連携、○リハビリテーションの理念</p> <p>3. 障害者自立支援制度及びその他制度 (1) 障害者福祉制度の理念 ○障害の概念、○ICF（国際生活機能分類） (2) 障害者自立支援制度の仕組みの基礎的理解 ○介護給付・訓練等給付の申請から支給決定まで (3) 個人の権利を守る制度の概要 ○個人情報保護法、○成年後見制度、○日常生活自立支援事業</p>
--------	---

(5) 介護におけるコミュニケーション技術（6時間）

①到達目標・評価の基準

ね ら い	<p>高齢者や障害者のコミュニケーション能力は一人ひとり異なることと、その違いを認識してコミュニケーションを取ることが専門職に求められていることを認識し、初任者として最低限の取るべき（取るべきでない）行動例を理解している。</p>
修 了 時 の 評 価 ポ イ ン ト	<p>5-① 共感、受容、傾聴的態度、気づきなど、基本的なコミュニケーション上のポイントについて列挙できる。</p> <p>5-② 家族が抱きやすい心理や葛藤の存在と介護における相談援助技術の重要性を理解し、介護職としてもつべき視点を列挙できる。</p> <p>5-③ 言語、視覚、聴覚障害者とのコミュニケーション上の留意点を列挙できる。</p> <p>5-④ 記録の機能と重要性に気づき、主要なポイントを列挙できる。</p>

②内容例

指 導 の 視 点	<ul style="list-style-type: none"> ・利用者の心理や利用者との人間関係を著しく傷つけるコミュニケーションとその理由について考えさせ、相手の心身機能に合わせた配慮が必要であることへの気づきを促す。 ・チームケアにおける専門職間でのコミュニケーションの有効性、重要性を理解するとともに、記録等を作成する介護職一人ひとりの理解が必要であることへの気づきを促す。
内 容	<p>1. 介護におけるコミュニケーション (1) 介護におけるコミュニケーションの意義、目的、役割 ○相手のコミュニケーション能力に対する理解や配慮、○傾聴、○共感の応答 (2) コミュニケーションの技法、道具を用いた言語的コミュニケーション ○言語的コミュニケーションの特徴、○非言語的コミュニケーションの特徴 (3) 利用者・家族とのコミュニケーションの実際 ○利用者の思いを把握する、○意欲低下の要因を考える、○利用者の感情に共感する、○家族の心理的理解、○家族へのいたわりと励まし、○信頼関係</p>

内 容	<p>の形成、○自分の価値観で家族の意向を判断し非難することがないようにする、○アセスメントの手法とニーズとデマンドの違い</p> <p>(4) 利用者の状況・状態に応じたコミュニケーション技術の実際</p> <p>○視力、聴力の障害に応じたコミュニケーション技術、○失語症に応じたコミュニケーション技術、○構音障害に応じたコミュニケーション技術、○認知症に応じたコミュニケーション技術</p> <p>2. 介護におけるチームのコミュニケーション</p> <p>(1) 記録における情報の共有化</p> <p>○介護における記録の意義・目的、利用者の状態を踏まえた観察と記録、○介護に関する記録の種類、○個別援助計画（訪問・通所・入所、福祉用具貸与等）、○ヒヤリハット報告書、○5W1H</p> <p>(2) 報告</p> <p>○報告の留意点、○連絡の留意点、○相談の留意点</p> <p>(3) コミュニケーションを促す環境</p> <p>○会議、○情報共有の場、○役割の認識の場（利用者と頻回に接触する介護者に求められる観察眼）、○ケアカンファレンスの重要性</p>
--------	--

(6) 老化の理解（6時間）

①到達目標・評価の基準

ね ら い	加齢・老化に伴う心身の変化や疾病について、生理的な側面から理解することの重要性に気づき、自らが継続的に学習すべき事項を理解している。
修 了 時 の 評 価 ポ イ ン ト	<p>6-① 加齢・老化に伴う生理的な変化や心身の変化・特徴、社会面、身体面、精神面、知的能力面などの変化に着目した心理的特徴について列挙できる。</p> <p>例：退職による社会的立場の喪失感、運動機能の低下による無力感や羞恥心、感覚機能の低下によるストレスや疎外感、知的機能の低下による意欲の低下等</p> <p>6-② 高齢者に多い疾病の種類と、その症状や特徴及び治療・生活上の留意点、及び高齢者の疾病による症状や訴えについて列挙できる。</p> <p>例：脳梗塞の場合、突発的に症状が起り、急速に意識障害、片麻痺、半側感覚障害等を生じる等</p>

②内容例

指 導 の 視 点	高齢者に多い心身の変化、疾病の症状等について具体例を挙げ、その対応における留意点を説明し、介護において生理的側面の知識を身に付けることの必要性への気づきを促す。
内 容	<p>1. 老化に伴うこころとからだの変化と日常</p> <p>(1) 老年期の発達と老化に伴う心身の変化の特徴</p> <p>○防衛反応（反射）の変化、○喪失体験</p> <p>(2) 老化に伴う心身の機能の変化と日常生活への影響</p> <p>○身体的機能の変化と日常生活への影響、○咀嚼機能の低下、○筋・骨・関節の変化、○体温維持機能の変化、○精神的機能の変化と日常生活への影響</p>

内 容	<p>2. 高齢者の健康</p> <p>(1) 高齢者の疾病と生活上の留意点 ○骨折、○筋力の低下と動き・姿勢の変化、○関節痛</p> <p>(2) 高齢者に多い病気とその日常生活上の留意点 ○循環器障害（脳梗塞、脳出血、虚血性心疾患）、○循環器障害の危険因子と対策、○老年期うつ病症状（強い不安感、焦燥感を背景に、「訴え」の多さが全面に出る、うつ病性仮性認知症）、○誤嚥性肺炎、○病状の小さな変化に気づく視点、○高齢者は感染症にかかりやすい</p>
--------	---

(7) 認知症の理解（6時間）

①到達目標・評価の基準

ね ら い	<p>介護において認知症を理解することの必要性に気づき、認知症の利用者を介護する時の判断の基準となる原則を理解している。</p>
修 了 時 の 評 価 ポ イ ン ト	<p>7-① 認知症のケアの理念や利用者中心というケアの考え方について概説できる。</p> <p>7-② 健康な高齢者の「物忘れ」と、認知症による記憶障害の違いについて列挙できる。</p> <p>7-③ 認知症の中核症状と行動・心理症状（BPSD）等の基本的特性、及びそれに影響する要因を列挙できる。</p> <p>7-④ 認知症の心理・行動のポイント、認知症の利用者への対応、コミュニケーションのとり方、及び介護の原則について列挙できる。また、同様に、若年性認知症の特徴についても列挙できる。</p> <p>7-⑤ 認知症の利用者の健康管理の重要性と留意点、廃用症候群予防について概説できる。</p> <p>7-⑥ 認知症の利用者の生活環境の意義やそのあり方について、主要なキーワードを列挙できる。 例：生活習慣や生活様式の継続、なじみの人間関係やなじみの空間、プライバシーの確保と団らんの場の確保等、地域を含めて生活環境とすること</p> <p>7-⑦ 認知症の利用者とのコミュニケーション（言語、非言語）の原則、ポイントについて理解でき、具体的な関わり方（良い関わり方、悪い関わり方）を概説できる。</p> <p>7-⑧ 家族の気持ちや、家族が受けやすいストレスについて列挙できる。</p>

②内容例

指 導 の 視 点	<ul style="list-style-type: none"> ・ 認知症の利用者の心理・行動の実際を示す等により、認知症の利用者の心理・行動を実感できるよう工夫し、介護において認知症を理解することの必要性への気づきを促す。 ・ 複数の具体的なケースを示し、認知症の利用者の介護における原則についての理解を促す。
-----------------------	---

内 容	<p>1. 認知症を取り巻く状況 認知症ケアの理念 ○パーソンセンタードケア、○認知症ケアの視点（できることに着目する）</p> <p>2. 医学的側面から見た認知症の基礎と健康管理 認知症の概念、認知症の原因疾患とその病態、原因疾患別ケアのポイント、健康管理 ○認知症の定義、○もの忘れとの違い、○せん妄の症状、○健康管理（脱水・便秘・低栄養・低運動の防止、口腔ケア）、○治療、○薬物療法、○認知症に使用される薬</p> <p>3. 認知症に伴うこころとからだの変化と日常生活 (1) 認知症の人の生活障害、心理・行動の特徴 ○認知症の中核症状、○認知症の行動・心理症状（BPSD）、○不適切なケア、○生活環境で改善 (2) 認知症の利用者への対応 ○本人の気持ちを推察する、○プライドを傷つけない、○相手の世界に合わせる、○失敗しないような状況をつくる、○すべての援助行為がコミュニケーションであると考え、○身体を通じたコミュニケーション、○相手の様子・表情・視線・姿勢などから気持ちを洞察する、○認知症の進行に合わせたケア</p> <p>4. 家族への支援 ○認知症の受容過程での援助、○介護負担の軽減（レスパイトケア）</p>
--------	---

(8) 障害の理解（3時間）

①到達目標・評価の基準

ねらい	障害の概念と ICF、障害者福祉の基本的な考え方について理解し、介護における基本的な考え方について理解している。
評価ポイント	<p>8-① 障害の概念と ICF について概説でき、各障害の内容・特徴及び障害に応じた社会支援の考え方について列挙できる。</p> <p>8-② 障害の受容のプロセスと基本的な介護の考え方について列挙できる。</p>

②内容例

視点指導の	<ul style="list-style-type: none"> ・介護において障害の概念と ICF を理解しておくことの必要性の理解を促す。 ・高齢者の介護との違いを念頭に置きながら、それぞれの障害の特性と介護上の留意点に対する理解を促す。
内容	<p>1. 障害の基礎的理解 (1) 障害の概念と ICF ○ICF の分類と医学的分類、○ICF の考え方 (2) 障害者福祉の基本理念 ○ノーマライゼーションの概念</p>

内 容	<p>2. 障害の医学的側面、生活障害、心理・行動の特徴、かかわり支援等の基礎的知識</p> <p>(1) 身体障害 ○視覚障害、○聴覚、平衡障害、○音声・言語・咀嚼障害、○肢体不自由、○内部障害</p> <p>(2) 知的障害 ○知的障害</p> <p>(3) 精神障害（高次脳機能障害・発達障害を含む） ○統合失調症・気分（感情障害）・依存症などの精神疾患、○高次脳機能障害、○広汎性発達障害・学習障害・注意欠陥多動性障害などの発達障害</p> <p>(4) その他の心身の機能障害</p> <p>3. 家族の心理、かかわり支援の理解 家族への支援 ○障害の理解・障害の受容支援、○介護負担の軽減</p>
--------	--

(9) こころとからだのしくみと生活支援技術（75時間）

①到達目標・評価の基準

ね ら い	<ul style="list-style-type: none"> ・介護技術の根拠となる人体の構造や機能に関する知識を習得し、安全な介護サービスの提供方法等を理解し、基礎的な一部又は全介助等の介護が実施できる。 ・尊厳を保持し、その人の自立及び自律を尊重し、持てる力を発揮してもらいながらその人の在宅・地域等での生活を支える介護技術や知識を習得する。
修 了 時 の 評 価 ポ イ ン ト	<p>9-① 主だった状態像の高齢者の生活の様子をイメージでき、要介護度等に応じた在宅・施設等それぞれの場面における高齢者の生活について列挙できる。</p> <p>9-② 要介護度や健康状態の変化に沿った基本的な介護技術の原則（方法、留意点、その根拠等）について概説でき、生活の中の介護予防、及び介護予防プログラムによる機能低下の予防の考え方や方法を列挙できる。</p> <p>9-③ 利用者の身体の状況に合わせた介護、環境整備についてポイントを列挙できる。</p> <p>9-④ 人の記憶の構造や意欲等を支援と結びつけて概説できる。</p> <p>9-⑤ 人体の構造や機能が列挙でき、何故行動が起こるのかを概説できる。</p> <p>9-⑥ 家事援助の機能と基本原則について列挙できる。</p> <p>9-⑦ 装うことや整容の意義について解説でき、指示や根拠に基づいて部分的な介護を行うことができる。</p> <p>9-⑧ 体位変換と移動・移乗の意味と関連する用具・機器やさまざまな車いす、杖などの基本的使用方法を概説でき、体位変換と移動・移乗に関するからだのしくみが理解され、指示に基づいて介助を行うことができる。</p> <p>9-⑨ 食事の意味と食事を取り巻く環境整備の方法が列挙でき、食事に関するからだのしくみが理解され、指示に基づいて介助を行うことができる。</p> <p>9-⑩ 入浴や清潔の意味と入浴を取り巻く環境整備や入浴に関連した用具を列挙でき、入浴に関するからだのしくみが理解され、指示に基づいて介助を行うことができる。</p> <p>9-⑪ 排泄の意味と排泄を取り巻く環境整備や関連した用具を列挙でき、排泄に関するからだのしくみが理解され、指示に基づいて介助を行うことができる。</p>

修了時の 評価ポイント	<p>9-⑫ 睡眠の意味と睡眠を取り巻く環境整備や関連した用具を列挙でき、睡眠に関するからだのしくみが理解され、指示に基づいて介助を行うことができる。</p> <p>9-⑬ ターミナルケアの考え方、対応のしかた・留意点、本人・家族への説明と了解、介護職の役割や他の職種との連携（ボランティアを含む）について、列挙できる。</p>
----------------	--

②内容例

指導の視点	<ul style="list-style-type: none"> ・介護実践に必要なところとからだのしくみの基礎的な知識を、介護の流れを示しながら、視聴覚教材や模型を使って理解させ、具体的な身体の各部の名称や機能等が列挙できるように促す。 ・サービスの提供例の紹介等を活用し、利用者にとっての生活の充足を提供し、かつ、不満足を感じさせない技術が必要となることへの理解を促す。 ・例えば「食事の介護技術」は「食事という生活の支援」と捉え、その生活を支える技術の根拠を身近に理解出来るよう促す。さらに、その利用者が満足する食事が提供したいと思う意欲を引き出す。他の生活場面でも同様とする。 ・「死」に向かう生の充実と尊厳ある死について考えることができるように、身近な素材からの気づきを促す。
内容	<p>< I 基本知識の学習・・・10～13 時間程度 ></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 介護の基本的な考え方 <ul style="list-style-type: none"> ○理論に基づく介護（ICF の視点に基づく生活支援、我流介護の排除）、○法的根拠に基づく介護 2. 介護に関するところのしくみの基礎的理解 <ul style="list-style-type: none"> ○学習と記憶の基礎知識、○感情と意欲の基礎知識、○自己概念と生きがい、○老化や障害を受け入れる適応行動とその阻害要因、○ところの持ち方が行動に与える影響、○からだの状態がところに与える影響 3. 介護に関するからだのしくみの基礎的理解 <ul style="list-style-type: none"> ○人体の各部の名称と動きに関する基礎知識、○骨・関節・筋に関する基礎知識、ボディメカニクスの活用、○中枢神経系と体性神経に関する基礎知識、○自律神経と内部器官に関する基礎知識、○ところとからだを一体的に捉える、○利用者の様子の普段との違いに気づく視点 <p>< II 生活支援技術の学習・・・50～55 時間程度 ></p> <ol style="list-style-type: none"> 4. 生活と家事 <ul style="list-style-type: none"> 家事と生活の理解、家事援助に関する基礎的知識と生活支援 ○生活歴、○自立支援、○予防的な対応、○主体性・能動性を引き出す、○多様な生活習慣、○価値観 5. 快適な居住環境整備と介護 <ul style="list-style-type: none"> 快適な居住環境に関する基礎知識、高齢者・障害者特有の居住環境整備と福祉用具に関する留意点と支援方法 ○家庭内に多い事故、○バリアフリー、○住宅改修、○福祉用具貸与

内 容	<p>6. 整容に関連したところとからだのしくみと自立に向けた介護 整容に関する基礎知識、整容の支援技術 ○身体状況に合わせた衣服の選択、着脱、○身じたく、○整容行動、○洗面の意義・効果</p> <p>7. 移動・移乗に関連したところとからだのしくみと自立に向けた介護 移動・移乗に関する基礎知識、さまざまな移動・移乗に関する用具とその活用方法、利用者・介助者にとって負担の少ない移動・移乗を阻害するところとからだの要因の理解と支援方法、移動と社会参加の留意点と支援 ○利用者と介護者の双方が安全で安楽な方法、○利用者の自然な動きの活用、○残存能力の活用・自立支援、○重心・重力の働きの理解、○ボディメカニクスの基本原理、○移乗介助の具体的な方法（車いすへの移乗の具体的な方法、全面介助でのベッド・車いす間の移乗、全面介助での車いす・洋式トイレ間の移乗）、○移動介助（車いす・歩行器・つえ等）、○褥瘡予防</p> <p>8. 食事に関連したところとからだのしくみと自立に向けた介護 食事に関する基礎知識、食事環境の整備・食事に関連した用具・食器の活用方法と食事形態とからだのしくみ、楽しい食事を阻害するところとからだの要因の理解と支援方法、食事と社会参加の留意点と支援 ○食事をする意味、○食事のケアに対する介護者の意識、○低栄養の弊害、○脱水の弊害、○食事と姿勢、○咀嚼・嚥下のメカニズム、○空腹感、○満腹感、○好み、○食事の環境整備（時間・場所等）、○食事に関した福祉用具の活用と介助方法、○口腔ケアの定義、○誤嚥性肺炎の予防</p> <p>9. 入浴、清潔保持に関連したところとからだのしくみと自立に向けた介護 入浴、清潔保持に関連した基礎知識、さまざまな入浴用具と整容用具の活用方法、楽しい入浴を阻害するところとからだの要因の理解と支援方法 ○羞恥心や遠慮への配慮、○体調の確認、○全身清拭（身体状況の確認、室内環境の調整、使用物品の準備と使用方法、全身の拭き方、身体の支え方）、○目・鼻腔・耳・爪の清潔方法、○陰部清浄（臥床状態での方法）、○足浴・手浴・洗髪</p> <p>10. 排泄に関連したところとからだのしくみと自立に向けた介護 排泄に関する基礎知識、さまざまな排泄環境整備と排泄用具の活用方法、爽やかな排泄を阻害するところとからだの要因の理解と支援方法 ○排泄とは、○身体面（生理面）での意味、○心理面での意味、○社会的な意味、○プライド・羞恥心、○プライバシーの確保、○おむつは最後の手段／おむつ使用の弊害、○排泄障害が日常生活上に及ぼす影響、○排泄ケアを受けることで生じる心理的な負担・尊厳や生きる意欲との関連、○一部介助を要する利用者のトイレ介助の具体的な方法、○便秘の予防（水分の摂取量保持、食事内容の工夫／繊維質の食物を多く取り入れる、腹部マッサージ）</p> <p>11. 睡眠に関連したところとからだのしくみと自立に向けた介護 睡眠に関する基礎知識、さまざまな睡眠環境と用具の活用方法、快い睡眠を阻害するところとからだの要因の理解と支援方法 ○安眠のための介護の工夫、○環境の整備（温度や湿度、光、音、よく眠るための寝室）、○安楽な姿勢・褥瘡予防</p>
--------	--

内 容	<p>12. 死にゆく人に関連したところとからだのしくみと終末期介護 終末期に関する基礎知識とところとからだのしくみ、生から死への過程、「死」 に向き合うところの理解、苦痛の少ない死への支援 ○終末期ケアとは、○高齢者の死に至る過程（高齢者の自然死（老衰）、癌死）、 ○臨終が近づいたときの兆候と介護、○介護従事者の基本的態度、○多職種間の 情報共有の必要性 ※ 「Ⅱ 生活支援技術の学習」においては、総時間の概ね5～6割を技術演習に充 てることとし、その他の時間は、個々の技術に関連したところとからだのしくみ等 の根拠の学習及び技術についての講義等に充てること。</p> <p><Ⅲ 生活支援技術演習・・・10～12 時間程度></p> <p>13. 介護過程の基礎的理解 ○介護過程の目的・意義・展開、○介護過程とチームアプローチ</p> <p>14. 総合生活支援技術演習 (事例による展開) 生活の各場面での介護について、ある状態像の利用者を想定し、一連の生活支 援を提供する流れの理解と技術の習得、利用者の心身の状況にあわせた介護を提 供する視点の習得を目指す。 ○事例の提示→ところとからだの力が発揮できない要因の分析→適切な支援技 術の検討→支援技術演習→支援技術の課題（1事例1.5時間程度で上のサイクル を実施する） ○事例は高齢（要支援2程度、認知症、片麻痺、座位保持不可）から2事例を選 択して実施 ※ 本科目の6～11の内容においても、「14. 総合生活支援技術演習」で選択す る高齢の2事例と同じ事例を共通して用い、その支援技術を適用する考え方の 理解と技術の習得を促すことが望ましい。 ※ 本科目の6～11の内容における各技術の演習及び「14. 総合生活支援技術演 習」においては、一連の演習を通して受講者の技術度合いの評価（介護技術を 適用する各手順のチェックリスト形式による確認等）を行うことが望ましい。</p>
--------	--

(10) 振り返り（4時間）

①到達目標・評価の基準

ねらい	研修全体を振り返り、本研修を通して学んだことについて再確認を行うとともに、就業後も継続して学習・研鑽する姿勢の形成、学習課題の認識をはかる。
-----	--

②内容例

指導の視点	<ul style="list-style-type: none">・在宅、施設のいずれの場合であっても、「利用者の生活の拠点に共に居る」という意識を持って、その状態における模擬演習（身だしなみ、言葉遣い、応対の態度等の礼節を含む。）を行い、業務における基本的態度の視点を持って介護を行えるよう理解を促す。・研修を通して学んだこと、今後継続して学ぶべきことを演習等で受講者自身に表出・言語化させた上で、利用者の生活を支援する根拠に基づく介護の要点について講義等により再確認を促す。・修了後も継続的に学習することを前提に、介護職が身に付けるべき知識や技術の体系を再掲するなどして、受講者一人ひとりが今後何を継続的に学習すべきか理解できるように促す。・最新知識の付与と、次のステップ（職場環境への早期適応等）へ向けての課題を受講者が認識できるように促す。・介護職の仕事内容や働く現場、事業所等における研修の実例等について、具体的なイメージを持たせるような教材の工夫、活用が望ましい。（視聴覚教材、現場職員の体験談、サービス事業所における受講者の選択による実習・見学等）
内容	<ol style="list-style-type: none">1. 振り返り<ul style="list-style-type: none">○研修を通して学んだこと、○今後継続して学ぶべきこと○根拠に基づく介護についての要点（利用者の状態像に応じた介護と介護過程、身体・心理・社会面を総合的に理解するための知識の重要性、チームアプローチの重要性等）2. 就業への備えと研修修了後における継続的な研修<ul style="list-style-type: none">○継続的に学ぶべきこと、○研修修了後における継続的な研修について、具体的にイメージできるような事業所等における実例（Off-JT、OJT）を紹介

事業の実施主体が開示すべき情報の内訳

研修機関情報	法人情報 ☆	<ul style="list-style-type: none"> ● 法人格・法人名称・住所等 ● 代表者名、研修事業担当理事・取締役名 △ 理事等の構成、組織、職員数等 △ 教育事業を実施している場合、事業概要 △ 研究活動を実施している場合、概要 △ 介護保険事業を実施している場合、事業概要 △ その他の事業概要 △ 法人財務情報
	研修機関情報 ☆	<ul style="list-style-type: none"> ● 事業所名称・住所等 ● 理念 ● 学則 ● 研修施設、設備 △ 沿革 △ 事業所の組織、職員数等 △ 併設して介護保険事業を実施している場合、事業概要 △ 財務セグメント情報
研修事業情報	研修の概要	<ul style="list-style-type: none"> ● 対象 ● 研修のスケジュール（期間、日程、時間数） ● 定員（集合研修、実習）と指導者数 ● 研修受講までの流れ（募集、申込み） ● 費用 ● 留意事項、特徴、受講者へのメッセージ等
	課程責任者	<ul style="list-style-type: none"> ● 課程編成責任者名 △ 課程編成責任者の略歴、資格
	研修カリキュラム (通信) 修了評価	<ul style="list-style-type: none"> ● 科目別シラバス ● 科目別担当教官名 ● 科目別特徴 演習の場合は、実技内容・備品、指導体制 ● 科目別通信・事前・事後学習とする内容及び時間 ● 通信課程の教材・指導体制・指導方法・課題 ● 修了評価の方法、評価者、再履修等の基準
	実習施設 (実習を行う場合)	<ul style="list-style-type: none"> ● 協力実習機関の名称・住所等☆ ● 協力実習機関の介護保険事業の概要☆ ● 協力実習機関の実習担当者名 ● 実習プログラム内容、プログラムの特色 ● 実習中の指導体制・内容（振り返り、実習指導等）

		<ul style="list-style-type: none"> △ 実習担当者の略歴、資格、メッセージ等 ● 協力実習機関における延べ人数
講師情報		<ul style="list-style-type: none"> ● 名前 ● 略歴、現職、資格 △ 受講者向けメッセージ等 △ 受講者満足度調査の結果等
実績情報		<ul style="list-style-type: none"> ● 過去の研修実施回数（年度ごと） ● 過去の研修延べ参加人数（年度ごと） △ 卒業率・再履修率 △ 卒業後の就業状況（就職率／就業分野） △ 卒業後の相談・支援
連絡先等		<ul style="list-style-type: none"> ● 申込み・資料請求先 ● 法人の苦情対応者名・役職・連絡先 ● 事業所の苦情対応者名・役職・連絡先
質を向上させるための取組み		<ul style="list-style-type: none"> △ 自己評価活動、相互評価活動 △ 実習の質の向上のための取組み、研修機関と実習機関との連携 △ 研修活動、研究活動 △ 研修生満足度調査情報（アンケート、研修生の声など） △ 事業所満足度調査情報（アンケート、事業所の声など）

●：必須 △：可能な限り開示

☆：他のページにリンクで対応可

※ インターネット上のホームページにより情報を開示する。

※ サーバーは、法人ごと事業所ごとに自ら確保する。

※ 都道府県は、研修機関のアドレスについて、受講者がアクセスしやすい方法で公開する。

※ 基本ストラクチャは変更しない。

別記第1号様式

第 号	修 了 証 明 書	
	氏 名	
		年 月 日 生
		介 護 保 険 法 施 行 令 （ 平 成 十 年 政 令 第 四 百 十 二 号 ） 第 三 条 第 一 項 （ 第 一 号 又 は 第 二 号 ） に 掲 げ る 研 修 の 課 程 を 修 了 し た こ と を 証 明 す る。 。
		年 月 日
	代 表 者 職 氏 名	
	介 護 員 養 成 研 修 事 業 者 名	
		印

- ※ 上記の修了証明書のサイズは、日本工業規格A4版（洋紙）以上の規格とすること。
- ※ 代表者の印は私印ではなく公印とすること。

新潟県介護職員初任者研修事業修了者名簿

事業所名		事業者名	
事業所番号		形式(通学・通信)	

年度第 回 (研修期間 年 月 日～ 年 月 日)

	修了証明書番号	フリガナ 氏 名	生年月日	修了年月日	研修修了による免除		
					研修名	修了年月日	研修実施機関
1							
2							
3							
4							
5							
6							
7							
8							
9							
10							
11							
12							
13							
14							
15							
16							
17							
18							
19							
20							
21							
22							
23							
24							
25							
26							
27							
28							
29							
30							